# 近年もっとも減少しているチョウ、チャマダラセセリ

チャマダラセセリのメス

チャマダラセセリは、やや局所的な分布を示すものの、北海道・東北～中部・四国の各地に生息していました。しかし、都道府県単位での絶滅が相次ぎ、今も確実に生息が確認できるのは、北海道・岩手・福島・茨城・長野・岐阜の6道県にすぎません。これらの地域でも、減少傾向は続いています。

食草はミツバツチグリやキジムシロといった、里山で普通に見かける植物です。本種は草丈が低く、比較的面積の広

●生息地である農地周辺の採草地（福島県南部　2012年５月）

かつては農地周辺にこのような採草地が広がり、本種は地域全体に広く生息していたと思われる。人の生活様式が変わり、草を利用しなくなったことが減少の主因。

●A：生息地である伐採直後の広葉樹林（福島県南部　2012年５月）

Aは、2011年春に伐採され、当初、食草はほとんど見られなかった。ミツバツチグリやキジムシロは裸地に侵入する先駆植物であり、1年後には食草の個体数が大幅に増え、周囲からチャマダラセセリが侵入してきて卵も数多く確認された。一方、Bは伐採後、数年程度経過した場所で、樹木が再び茂り、チャマダラセセリは生息できなくなってしまった。

●B：伐採後、2年程度経過し樹木が生長した広葉樹林（福島県南部）

チャマダラセセリは、人が住む以前には、攪乱環境を渡り歩きながら世代をつないできたのだろう。人為により安定した維持が見込める採草地や放牧地と、伐採地のような一時的な生息地との連続性を考慮しながら、保全策を空間的な側面から実施することが、本種の場合は特に難しい。

い半自然草原を好み、採草地や農地周辺など定期的に草刈りがなされる草原、放牧地、伐採直後の林などが、主な生息地となっています。

現在、現状把握および、減少要因や保全方法の検討のため、岩手・福島・茨城・長野の各県で、詳細なモニタリング調査を行っているほか、一部では具体的な保全の取り組みも進めています。

## ■減少の要因

主な原因は、草原性のチョウに共通することですが、草原環境の消失や悪化にあります。特に、採草地は現在ではほとんど利用されず、長野県の開田高原では、近年まで残っていたわずかな採草地が次々に植林されています。こうして草原が減少する一方で、残っている草地では徹底した野焼きが行われるため、本種が羽化に至らず、生息条件はさらに厳しくなっています。福島～茨城県では、農地周辺の草地が放棄されてきており、そのうえ新しい伐採地も年々減少し、生息範囲は年々狭くなっています。岩手県では、良好な採草地が人工の牧草に変えられたために、残されたわずかな生息地が孤立しています。

## ■保全にむけて

調査を進める中で、本種がなぜ急激に減少しているのかという原因をほぼ把握でき、草原環境の維持方法など、具体的な保全対策も明らかになりつつあります。主な対策は、草原環境の維持ですが、なかでも特に配慮すべき2つのキーがあります。ひとつは「夏型の産卵場所」、もう一つは「生息地のネットワーク」です。

本種は草丈が低く、土がむきだしになっている場所に好んで産卵しますが、これは夏型でも同様です。このため、年2回発生する地域では、春だけではなく、夏に羽化した成虫が産卵できる場所の確保が必要です。草を利用することが少なくなった現在、年1回の草刈りしか行わない場所が多く、草丈が高くなる夏の世代では、産卵場所の確保が大きな課題となります。

また、本種は生息地あたりの個体数の密度は一般的にそれほど高くない一方、移動性がある程度大きく、生息地がネットワークのようにつながることで全体が存続する傾向が強いため、孤立した生息地ほど絶滅の危険性が高く、保全上、生息地のネットワーク構築を意識した対策を行うことが重要になります。

これらの点からも、本種の保全は非常に難しい課題です。まずはモデルとなる保全方法を確立すべく、取り組みを続けていきます。

**●火入れされた採草地**
**（長野県開田高原　2011年5月）**

火入れ後は、枯れ草もほとんど残っていない。本種は枯草内で蛹化するため、蛹が焼けてしまうと推測される。成虫の時期に訪れると、丈の低い草原は一見生息に適するように思えてしまうが、生息地全面が火入れされた場所で、本種が生息する場所は存在しなかった。さらに、火入れされた草原では他のチョウもほとんど見られず、チョウに与える影響は実は深刻だ。かつて草が利用されていた頃は、前年秋に草刈りをしたために草が乏しいなど、火を入れる必要がない草原も存在し、チョウも生息地を行き来しながら生息できた。伝統的農業に組み込まれていた「火入れ」ひとつをとっても、背景にある生活様式の変化によって、チョウに与える影響が変わっていることがわかる。

**●植林される採草地**

利用されず価値がなくなり、次々と植林が行われている。採草地には、草原性の貴重な植物も数多く見られた。

**●半自然の草地（手前）と改良草地（奥）**
**（岩手県早坂高原　2010年6月）**

外来牧草が利用される以前には、放牧地は本種や草原性の植物にとって好適な環境だったが、現在では在来の草地が利用されることは限られ、牧場の縁に点在して孤立が進んでいる。

**●生息地の管理**
**（長野県開田高原　2011年4月）**

本種の生息環境を再生するため、土地所有者の了解を得て草刈りを実施した。地域住民や当協会会員の方にご参加をいただいた。